

Book Review

対話と承認のケア ナラティブが生み出す世界

著：宮坂道夫



A5判・282ページ

定価：本体2,400円＋税

発行：医学書院（03-3817-5650）

死なないロボットに自分の話を 本気で語れるか

ケアする側にナラティブがあるとき、
対話と承認のケアが動き出す

評者

池田喬

明治大学文学部准教授

対話や承認がケアになる。そういう言葉の不思議な力がある。ケア者が、被ケア者の人生に意味を与えているナラティブに耳を傾けると、ただ聞いてくれる人があるというだけで、医療的な治療・処置とは別の仕方、ケアが起きている。

ここまででは何度も語られてきたことだ。本誌の読者で「ナラティブ・アプローチ」なんて聞いたことがないという人は稀だろう。しかし、こういうよくある語り方では対話的ケアが、当然のごとく、医療従事者の〈本業〉の外部に位置づけられている。現に、検査、診断、治療などの定式化された医療実践とは対照的に、言葉による対話的实践にはほとんど名前もなく、診療報酬の対象にもならない。ナラティブによるケア力の背後には相当な経験やスキルがあるはずなのに、それらが特別なものと見なされていない。結果、よき聞き手たれといったスローガンでナラティブ・アプローチは終わらせられがちだ。

第1章で著者はこうした状況認識に立ち、ナラティブを聞くときに何が起きているのか、何が行なわれているのかへと視線を丁寧に向け直す。人の生活や人生史までを聞くという行為は、録音装置のように相手の声を漏らさず拾うことではないはずだ。ケア者は聞くと同時にすでに語り、聞き手としての態度を示し、相手のナラティブに複雑な仕方でも参加している。相手のナラティブを読み解き理解しようとする「解釈」、対話自体が対立に陥ることなく成立するように工夫する「調停」、他者のナラティブにあえて立ち入り、評価したり、修正や再考を促したりする「介入」。4～6章では医療現場におけるナラティブ・アプローチのこの三側面が分析される。

終章で、対話実践の前提としての「弱さの共有」という仮説が提示されるところが刺激的だ。非常に高度な医療用ロボットができ、態度もとても良い。このロボットが永久不滅の頑丈なロボットである場合と、故障してそのうち廃棄されるロボットであれば、どちらに話をしたくなるだろう。相手もいずれ死んでしまう存在だと思えないなら、話を聞いてもらっても空々しいと感じるのではないか。ケア者の側の死の可能性が、病を抱える人へのケアを真に成り立たせる要件であるように思われる、と著者は最後に言う。

この最終地点から、本書全体を見直したとき、一貫したメッセージが流れていることがわかる。ケア者が、ナラティブ・アプローチを実践しようとするなら、（エビデンスに基づいた）正解を間違えずに教えようとするときは違う倫理的誠実さが必要になる。この倫理的態度には、ケア者と被ケア者が同じ地平に

立つ「協働の姿勢」が含まれる。「よく聞こう」では同じ地平に立っていない。ケア者はナラティブを聞くだけで、自分の側にも生活と人生と固有なナラティブがある、という発想がないからだ。本書は、この落とし穴から出て、弱さの共有へと進むことで、ナラティブ・アプローチのさらなる可能性を開く1冊なのだ。

ナラティブの世界は複雑で奥行きがある。その世界に対応できる豊かな言語は医療の言語からだけでは得られないだろう。2章,3章で、著者は、文学、言語学、哲学、倫理学、社会学などを縦横に行き来しながら、ナラティブとは何かを何重にも解き明かす。ナラティブ・アプローチを、医療従事者だけでなく、教師、親、バーテンダー、美容師なども含めて、心のケアにかかわる人々による対話的实践と位置づけようとする著者の目論見どおりに、ぜひ広く読まれてほしい。